

第53回 総会学術大会シンポジウムII

会期：平成9年4月5日

会場：パシフィコ横浜会議センター

デジタル画像の有用性

座長集約

1. 心臓カテーテル検査領域におけるデジタル画像の有用性
2. 血管撮影検査におけるデジタル画像の有用性
3. 消化管撮影領域におけるデジタル画像の有用性
4. 臨床におけるDRの有用性とその将来

座長

中西省三
大阪通信病院
江口陽一
山形大学医学部附属病院
多賀谷靖
国家公務員共済組合連合会虎の門病院
松本 貴
大阪大学医学部附属病院
大井博道
大阪大学医学部

座長集約

Symposium

中西省三
大阪通信病院

現代医学において医用画像の役割は絶対的な存在となっている。医療の高度化とともに増加の一途をたどっている医用画像を目的にあった画像に加工し、より利用しやすい形にして提供することは重要なことである。また、医療機器の高性能化と通信技術の発達によって、得られた画像情報を必要な時に必要な場所に提供することが可能になりつつあり、これらを実現する前提となるのがデジタル画像技術である。

新技術が開発される時、旧技術と比較するのは当然として、他に多くの可能性を持つ場合、限られた部分だけを比較評価すると全体の姿を見失い、新技術への移行を遅らせる結果となる。評価の対象が医療に関わる画像が故に慎重を期すのは当然であるが、医療そのものが大きな変革の最中にあり、氾濫する医療情報をより合理的に、効率的に利用するためには医用画像デジタル化は避けられない。変化の激しいデジタル技術に対する評価はその時点でのものであり、決して固定化してはならない。

平成8年、第52回総会では、一般撮影領域におけるデジタル画像を対象にシンポジウムが企画された。本シンポジウムでは、造影検査領域におけるデジタル画像技術を検証し、今後の方向を模索する機会にするべく企画された。

江口陽一氏(山形大学医学部附属病院)は、心臓カテーテル検査領域においてシネ画像とDA画像を比較し、DA画像の実用性を述べている。DA画像の現時点

での問題点を整理し、検査結果をより効率よく利用するため、規格の標準化とより一層の技術改革の必要性を指摘している。

多賀谷靖氏(虎の門病院)は、頭部を中心にした血管造影検査、その主流をなすDSA技術についての評価、治療を目的とするIVRに対する評価を行いその有用性を述べた。

松本 貴氏(大阪大学医学部附属病院)は、消化管を中心にしたX線テレビシステムによる造影画像のデジタル化について現状の評価、問題点を述べた。DR画像の持つ利便性(加工性)ゆえに造影技術の研鑽努力を怠ってはならないと警告している。

大井博道氏(大阪大学医学部)は、医師の立場から要求する画像、現時点でのデジタル画像の問題点、フィルム法との比較評価、画像情報のあり方、利用方法などを述べた。

造影検査領域におけるデジタル画像の評価は高く、その即時性や利便性の他にDSA技術や回転DR(DSA)技術のようにフィルム法との比べようのない新技術が付加されている。また、DR技術はIVR技術を発展させ、PACSに代表される医療情報のシステム化の素となるとともに、レーザプリンタを生出し、ドライイメージャへと発展し画像通信を可能にした。現状の欠点を認識し、DRが持つ可能性を育んでより効率的な医療を提供することが私たちの責務と考える。